

「己を知れば邪心なし」の
精神をモットーに、
超高齢社会を見据えて
“世界に飛翔する
知と癒しの匠”を育成、
全人的医療の実現目指す

東京医科歯科大学
学長

Special Interview

吉澤 靖之
先生

① インフォメーション・テクノロジーと人工知能の進化に加え、急速なグローバル化の潮流や超高齢社会の到来は、21世紀の医療のあり方を大きく変えようとしています。そうした流れの中で医療人はどうあるべきなのか。医療人として大切なものは何か。医療の道を志す若者は何を学べばいいのか。「知と癒しの匠を創造し、人々の幸福に貢献する」ことを標榜し、世界に冠たる医療系総合大学を目指す東京医科歯科大学の吉澤靖之学長にお聞きしました。

超高齢社会の到来の中
患者さんと共に歩く医療を

日本をはじめ欧米先進国では今、急速な少子高齢化が進み、超高齢社会を迎えようとしています。こうした中で、医学の分野では先制医療と在宅医療が中心になりつつあります。先制医療は「個別化予防医学」で、個人の遺伝的背景を基にした一次予防をいいますが、若い若きも元気に病気をせずに人生を送るための医療です。もう一つの在宅医療で大事なことはチーム医療で、チーム医療ができる医療人を育てることも急務です。

超高齢社会では、疾病構造も自ずと変化してきます。がんや認知症、パーキンソン病、加齢による歯のさまざまな疾患などが想定されますが、今後は医学と歯学が密接な連携をもって全人的医療を展開していくことがますます重要になってきます。

こうした中で、我々はどうな医療人を目指すべきなのかを考え、東京医科歯科大学では昨年、「基本理念」を策定しました。「知と癒しの匠を創造し、人々の幸福に貢献する」ことを謳っており、これこそが東京医科歯科大学の、そして医学・歯学を志す者のミッションだと思います。

ここでいう「知」とは、知識と技術と自己アイデンティティであり、「癒し」とは教養と

感性、多様性を受け入れるコミュニケーション能力のことと言えるでしょう。どんなに技術や知識があっても、己を知らなければ医療人として失格です。患者さんの多様性を受け入れなければいけません。己がしっかりしていないと、その多様性を受け入れて、専門家として正しい助言をするのが難しくなります。そこで、「知」に自己アイデンティティが加わるのです。

相手の心を理解した上で、専門家としての助言ができること、なおかつ一緒に悩む、苦しむのが医療人です。だからこそ、人間としての教養、感性とコミュニケーション能力が欠かせないのです。患者さんはひとりひとり異なります。患者さんのバックグラウンドについての理解を含めた全人的医療が求められているのです。

IT時代だからこそ
重要になる知と癒しの能力

近年、インフォメーション・テクノロジー(IT)と人工知能(AI)、そして3Dプリンターの進歩は、目覚ましいものがあります。この3つは医療の現場にも大きな変化をもたらすと考えられます。超高齢社会では、遠隔医療が重要視されるようになります。コンピュータの画面を見て操作や判断をするわけで、医師としてITに関する知識やスキルが必要となってきます。また、3Dプリンターによって作られた歯の模型や臓器などを用いて手術の練習ができるようになります。

しかし、ここで大切になってくるのが、「知と癒しの能力」です。ITやAIのデータ処理能力は人間の比ではありません。しかし、AIは自ら課題を見つけて自ら解決を見つけることはできません。また、AIが進歩して患者さんと少しぐらいの会話ができるようになって、最終的にその病気のバックグラウンドを考察して正しい判断をできるのは、「知と癒しの能力」を持った医師なのです。ITやAIが進歩する時代こそ、逆に「知と癒しの能力」はますます必要になってくるのです。AIは人間より知識をもっているといえるでしょう。だが、知識がたくさんあるのは教養ではありません。

それと、将来の保険医療制度の問題に

もかかわってくるのですが、これからは尊厳を持って死を迎えるにはどうすればいいか、という「死生観」も重要になってきます。

こうした医療人の道に進むため、高校時代には先ほど述べた教養と感性、多様性を受け入れるコミュニケーション能力の3つを身につけてほしいと思います。

教養とは、幅広い知識と精神の修養などから来る創造的活力や心の豊かさ、理解力であり、状況の変化に広い視野からの確に対応できる力と定義することができます。感性は、外からの刺激に応じて何らかの印象を感じ取る、その人の直感的な心の働きであり、その感じたことを何らかの形で表現する力です。

そのためには、失敗を恐れないことが大事です。自分は何者で何ができるかという自己アイデンティティを身につけて欲しいと思います。失敗は人間形成に必要です。最後に、ITのスキルと知識を習得しておくこと、医療の世界にやりがいを感じて医療人になるという強い意思をもつことが大切です。

グローバルヘルスを
推進する医療人の育成

本学の「TMDU型グローバルヘルス推進人材育成構想:地球規模での健康レベル向上への挑戦」が、2014年度の文部科学省「スーパーグローバル大学創成支援」タイプA(トップ型)に採択されました。わが国は、世界トップクラスの長寿国であり、国民皆保険をはじめ保険医療の分野の制度が充実しています。その経験と実績を踏まえて世界の健康レベルの向上に貢献しようというものです。今年3月には、「統合教育機構」と「統合国際機構」を発足させ、グローバルヘルスを推進する人材の育成に全力を尽くしています。

本学では、これまでも野口記念医学研究所共同研究センター(ガーナ)と東京医科歯科大学・ラテンアメリカ共同研究センター(チリ)、チュラロンコーン大学・東京医科歯科大学研究教育協力センター(タイ)の3つの海外拠点に医学科や歯学科、口腔保健学科の学生を派遣しています。また、海外の医療人材育成にも力を入れてお

り、チリ大学及びタイのチュラロンコーン大学とのジョイント・ディグリー(共同学位)プログラムが日本で初めて認められ、今年それぞれの入学者を迎えました。

また2020年に開催される東京オリンピック・パラリンピックに対応してスポーツサイエンス機構を設置しました。

医・歯・工連携の強化で
患者さんのための全人的医療

これからの医療をさらに充実させていくためには、医学・歯学・工学の連携体制をより強化すること、全人的医療の実現を目指すことが求められています。この医学・歯学・工学の連携研究の原動力となる「統合研究機構」と、大学運営に関わるIRの推進など全学の情報戦略を企画立案できる「統合情報機構」の設立も構想しています。今年4月からは、超高齢社会に備えた「長寿・健康人生推進センター」がすでにスタートしました。

東京医科歯科大学は、今年1月、タイムズ・ハイアー・エデュケーション(THE)が公表した「世界最高の小規模大学を選出するランキング」で日本第1位、世界第12位の大学に選出されました。これを励みに、「教職員と学生が誇りと気品に満ち、生き生きしている」「患者さんは本学の病院を信頼し、受診していることを誇りに思う」「同窓生が胸に本学のバッジを付け、それぞれの社会で活躍している」という大学の将来像の実現に向け、「積極思考で全力を尽くす」「己を知れば邪心なし」の精神をモットーに、「世界に飛翔する知と癒しの匠」の育成に全力を注いでいきます。

Yasuyuki Yoshizawa

1972(昭和47)年、東京通信病院医師。1979(同54)年、米国ウイスコンシン医科大学客員教授。その後、筑波大学臨床医学系講師、東京医科歯科大学医学部助教授、同大学院歯学総合研究科教授、同大保健管理センター長、同大医学部附属病院副院長などを歴任。2008(平成20)年、同大理事、副学長、2014(同26)年4月から同大学長。